

第1回目 感想

* 環境情報学府 環境イノベーションマネジメント専攻 D1

先生のプロフィール紹介では、育児をされながらカナダに客員研究員として行かれ、さらに海外出産までご経験された点が大変興味深かったです。以前から子連れ海外赴任（or 留学）に憧れているので、益々やってみたくなりました。また、3人もお子様を育てながら第一線で現在もご活躍され、オンリーワンとして研究成果を継続的に創出されている点は非常に学ぶべき点が多かったです。

帰りの電車で過去3年間の講義記録をざっと拝読した中では、竹田先生のプレゼン資料が興味深いものでした。しかしながら、概して多くの講演者のご発表内容は、具体的な研究成果の紹介部分が多いと感じました。本講座の趣旨から鑑みますと、研究紹介よりはキャリアパスや転職等、キャリアに関する経験談に重点を置いたお話の方が良いのではないかと感じた次第です。

一方、本講義は、各専門分野の異なる先生方の体験談的な講演を毎回続けるだけではちょっともったいない気がしました。キャリア開発関連の研究者（専門家）は国内外で増えてきており、多々理論や論文、関連学会等も存在しています。これまでの理論的な蓄積もされてきているため、（他の受講生のニーズがあれば…）様々なキャリア理論を体系的に学んだり講演頂いたりするなど、違ったアプローチで互いの学びの場やワークを取り入れることなども試みとしていいかもしれないと思いました。ただ、毎回、折角の貴重な時間を割いて講演頂く先生方に対して、今年度は受講者（聴講人数）が少ない点は大変残念で申し訳ない感じもしています。（昨年度の勝間和代氏のように、よほど名の知れた演者でないと聴講生を集めることも大変難しいなと思いました。）

* 環境情報学府 環境イノベーションマネジメント専攻 D2

女性研究者の現状についてのお話があった。

「なぜ女性研究者の数が少ないのか」といった切り口によって、調査、考察が進められていた。私は、美術史を専門としているが、授業で上記の言葉を聞いたときに、美術史の世界においても1971年に米国の美術史家、リンダ・ノックリン（Linda Nochlin）によって“Why Have There Been No Great Woman Artists?”というタイトルの論文が発表されたことを即座に思い起こした。

私自身が美術史の勉強を始めた時には、この論文はすでに古典となりながらも、フェミニズム美術史、ジェンダー・スタディーズによる美術史研究は既に一般的なものとなっており、専門とする研究者も数多く存在した（現在も）。女性芸術家にしろ、女性研究者にしろ、男性のそれとは比較にならない数の少なさは、単純な問題ではなく、古来から続いてきた社会的構造的な問題であると思われる。多様な考え方が可能となった2010年の今、このような問題を考え、また実験的な動きが多少なりともできることを幸福に思い、これらの問題を多角的に考えていきたい。

この授業を通して、そのようなことをより深く考えていければ、と思っている。

* 環境情報学府 環境イノベーションマネジメント専攻 D2

女性キャリアパスの講義は、社会人学生としてとても興味深い講義であり今回受講を希望した。有光先生は育児休業も十分に取れない中で研究者として続けられてきたことは同じ女性の立場から見ても、身体的な苦勞もあったと思われるが精神的な側面の苦勞も多かったのではないかと感じた。

ここ数年、男女共同参画が積極的に進められるようになり、大学内の女性が働く環境が整ってきたと思われる。しかし、まだまだ十分とは言えない。例えば、ベビーカーを押しながら大学の門に入ってくることも困難である。滅多にあることではないが、書類を提出するため学校に来た時、まだ歩けない子供を一緒に連れてきたがベビーカーを押しただけでは門を入ることはできず、ベビーカーを持ち上げて入ってきた経験がある。このような経験も女性の立場だから気づくこともあり、それらを改善に向けて働きがけて行くことも女性として重要なことだと感じた。

* 環境情報学府 環境リスクマネジメント専攻 M1

昨年受講をした先輩から、今後の励みになるとの奨めもあり受講いたしました。

講義の内容は、先生のご経験などを交えながら、研究職というものを本質的に考える機会を得ることができ、有意義なものでした。

そして、我が国における特に理系の女性研究者の割合が、諸外国に比べて非常に低いことに驚きました。大学や大学院での女性の割合は増加傾向にありながらも、卒業・修了をする際に研究職を選択しない、また出来ない現状には、受け入れ側と志す側の意識の変革が重要だと思います。

特に、受け入れ側としては、環境整備や体制づくりをはじめとした制度づくりが不可欠です。しかし、単に女性研究者の割合を増加するのではなく、「研究職」としての人材育成を重視することが大切だと考えます。

今後、授業に望むことは、転職をして研究者となった方のお話や、広い分野の方々のお話を伺ってみたいです。

これからの講義を聴くなかでも女性にとって働きやすい環境とはどういったことか考えていきたい。

* 環境情報学府 環境イノベーションマネジメント M1

有光先生の話により、女性研究者がキャリアと家庭を両立することがとても困難だということが分かりました。特に日本の場合、女性に育児と家事の負担が重く、研究だけではなく、一般の仕事

も長く続くことが難しいだろうと思いました。

私は中国からの留学生なので、先生の話を知って、中国の女性研究者の現状に気になってきました。少し調べたら、2008年のある中国の傑出した人文社会科学者を対象とする調査を見つけました。その調査により、調査の対象として入選した女性の比率は全体の5.07%で、かなり低い数字でした。もちろん、それは全体的な統計ではなく、人文社会専門の、そして傑出した学者のみに対する統計にすぎないですが（ちなみにその「傑出」の判定標準はよく列挙されてありませんでした）、およそその参考ぐらいにはなれると思います。比率が低かったです。

中国では、夫婦が共働きするのは普通なので、家庭の事情が女性のキャリアの障害になることはないとは言えませんが、そんなに深刻ではないと思います。それなのに女性研究者の数が少ないということの原因を追究すれば、個人の意向、つまり女性はどういうふうに関心を持って自分を社会の中で位置づけるのも一つの原因だと私は考えています。

私の大学時代の学部には、大部分の先生が女性で、そして普通の講師でした。数少ない教授は例外なく男性でした。女性の先生の中で、修士号や博士号を取っていた方がほとんどですが、研究を続けている方が一人二人しかいませんでした。

それは、できないではなく、やりたくないということではないでしょうか。つまり講師の仕事に満足し、学術の核心層に入る意欲はないのではないかと、私は思っています。

話は少し飛んだかもしれませんが、これは中国の女性のキャリア選択の一つの特徴ではないかと、私は先生の講義を知った後考えました。